

編集後記

早稲田大学中央図書館が安部磯雄記念球場の跡地に建設され、竣工開館したのが一九九一年四月であるから、二一 六年を迎えた現在、中央図書館は一五年の歳月を閉じたことになる。中で仕事をしている者としては、そんな実感はないが、やはり一五年というのはいまわて長い。大正時代がまるまる入ってしまつたように、中央図書館開館時から今日では大きな変化がある。

たとえば、専任職員の数である。新中央図書館ができたころは、図書館で働く専任職員は一四 名くらいいた。一五年たつた二一 六年二月現在、早稲田大学図書館（中央図書館・高田早苗記念研究図書館・戸山図書館・理工学図書館、所沢図書館、本庄分館）および学内各機関出向者もふくめて七四名である。ほぼ半減している。仕事が少なくなつたわけではない。むしろ、図書や雑誌の冊数も増えているし、図書館へ受入れる冊数も増えている。また、図書や雑誌だけでなく、電子媒体にかかわる業務も付け加わり、年々その比重を増していることは、いまさら言うまでもないだろう。

人はへりつづけ、仕事はふえつづける。この状況に対処するために、これまで図書館ではさまざまな方策をたててきた。通常このことは《業務の合理化》という表現でくられる。目録の電子化を大きな契機として、同

一・同種業務の集中化、ルーティン業務の委託化、業務処理そのものの簡素化など、さまざまな方法が試みられてきた。この一五年の間に、こうした業務の変化・合理化に沿つて組織も大きく変り、統廃合をくりかえしてきた。ちよつと見には、そんなに人がへつているようにも見えないが、それは専任職員のかわりに、業務委託をしている会社の社員や、パートタイムの派遣社員がふえているせいである。

近年では、時の政府の《改革政策》、《官から民へ》の流れに沿つて、世の多くの公立の図書館や文書館、博物館や美術館なども、こうした業務の改革を迫られていると聞く。独立行政法人化や指定管理者制度の導入により、図書館の経営そのものまで、事実上民間に委託されてしまうところも始めているようだ。

時代の変化・文化や学芸のあり方の変化、出版や情報のあり方の変化にもなう必然的な変化といえはそれまでであるが、早稲田大学図書館がたどってきた業務や組織の変化・変遷も、こうした世の流れから無縁というわけにも行かない。

つねにvarietyつづけ、新たなものが付け加えられつづける図書館業務の中で、依然として変わらぬ見識を求められる部分のこのりつづけることも、また大きな問題であると言わざるを得ない。それにしても、団塊世代が定年となりはじめる二一 七年はもう直前である。ちよつと二一 七年には、早稲田大学は創立二二五周年をむかえる。これは創立者である大隈老侯が「人生一二五年説」をとなえた

ことに由来する年のくぎりであるが、大学と同時に創立された図書館も、一二五周年を迎えることになる。

しかし世界の視座から見れば、創立一二五年というのはまだ若い大学であり、発展途上の図書館であるともいえる。

伝統をまもりつづ、つねに新しい分野、新しい問題に果敢に挑戦しつづけることこそ、大学図書館の責務であり、それはどのように世の中が変わるうと変わらないのではないだろうか。

早稲田大学図書館紀要は今後も、図書館学、書誌学および図書館をめぐる諸問題に関する論考を掲載する場として機能してゆきたいと考えている。
(記・松下)

早稲田大学図書館紀要編集委員会

委員長 松下 眞也(調査役)

委員 久保尾俊郎(資料管理課)

渡邊 朝子(資料管理課)

事務局 渡邊 孝之(資料管理課)

早稲田大学図書館紀要 第53号

二〇〇六年三月十五日 発行

編集 早稲田大学図書館紀要

編集委員会

発行人 守 田 芳 秋

印刷所 (株)早稲田大学メディアミックス

発行所 早稲田大学図書館

東京都新宿区西早稲田一ノ六ノ一

〇三(三三〇三)四一四一